

石狩湾のシャコ調査と漁獲状況について

・はじめに

石狩湾のシャコの漁獲量は増減を繰り返しながら推移し、平成 26 年は 166 トンに増加しています（図 1）。中央水産試験場では毎年シャコの漁獲物測定調査を行っています。これまでの調査結果に基づいて現在の石狩湾のシャコの状況について紹介したいと思います。

石狩湾のシャコの生態と漁業については「試験研究は今」601 号（三原行雄：石狩湾のシャコのおはなし）に詳しくまとめられています。その概要を紹介しますと、シャコは砂～泥場の海底に巣穴を掘って生活し、6～7 月に産卵します。卵は 7 月下旬～9 月下旬にふ化し、浮遊生活の後に海底生活に移行します。石狩湾では北側の厚田沖に着底するシャコが多く、成長しながら南下していくと考えられています。漁業は刺し網で行われ、小樽市～石狩市の沿岸域が漁場となっています。漁期は産卵前の 5～6 月に行われる春漁と、産卵と脱皮が終わった後の 10～11 月に行われる秋漁の二漁期に分かれます。

・調査結果

漁獲物の測定調査では、春漁（石狩市厚田地区）と秋漁（小樽市高島地区）で漁獲されたシャコを対象に頭胸甲長（以下、甲長。図 2）を測定しています。

その測定データを見ると（図 3）、大型の漁獲物では雄が多くなるのが分かります。また漁獲物の大きさは年によって異なりますが、図 1 の漁獲量のグラフと比較してみると、平成 19 年に甲長 30mm に満たない小型シャコが獲れ、それ以降の年で漁獲量が増加しています。平成 25 年にも石狩市厚田地区の小型シャコが増加した後、平成 26 年にかけて漁獲量が増加しています。

シャコは他のエビ・カニ類同様、鱗や耳石のような年齢を調べる方法が確立されていないのははっきり分かりませんが、本州の知見を踏まえると甲長 20mm 台前半の 2 歳で小型のシャコとして漁獲され始め、その豊度が大きいときに、その後数年間の漁獲が増加している可能性が見えてきました。中央水産試験場では今後も毎年、小型シャコの漁獲状況を注目していくことが資源動向の把握には重要と考えています。

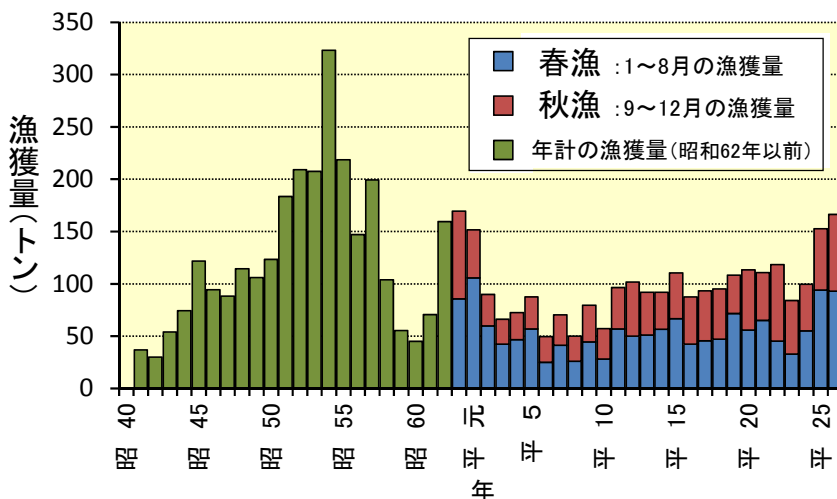


図 1 石狩湾海域におけるシャコの漁獲量の推移



図 2 シャコの甲長(頭胸甲長)

・さいごに

シャコの年齢を調べる研究も行われてきましたが石狩湾では決定打となっていません。また資源量がどのくらいあるのか、適切な漁獲圧はどのくらいなのか評価が難しいのが現状です。一方、石狩湾の沿岸漁業では主要水産物の資源水準の低下や魚価の低迷の中、シャコは貴重な収入源として重要性が増しています。不明なことが多いだけに、例えば産卵期前の春漁では漁獲規模（漁期や網数）の無秩序な拡大を自制する意識を高めるなど、上記のような漁獲物の動向を注意深くモニタリングしながら、今後もシャコ資源を大事に利用していくことが必要です。

(中央水産試験場 資源管理部 本間隆之)

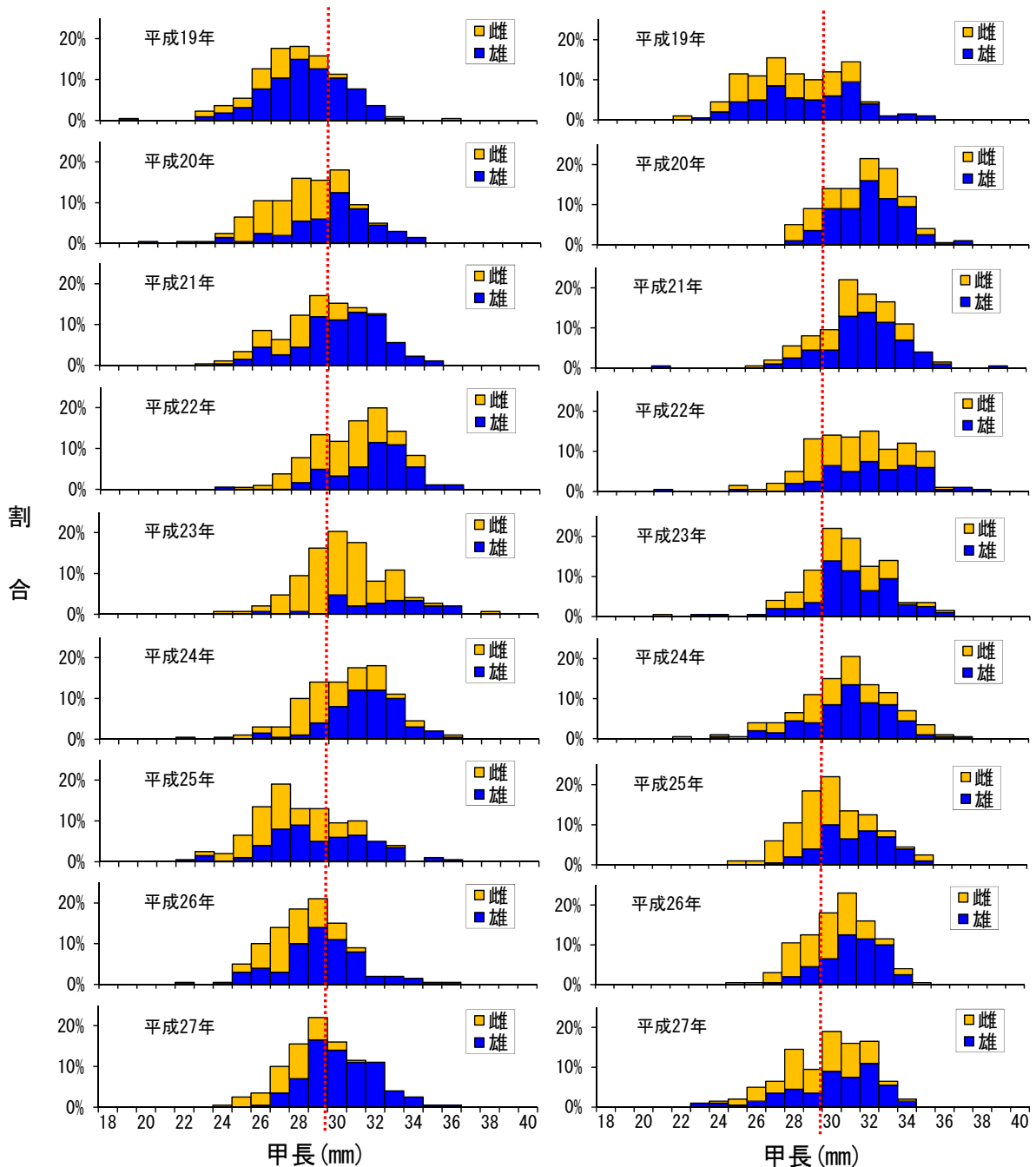


図3 平成19～27年のシャコの甲長組成の推移
石狩市厚田地区の春漁(5～6月 左)と小樽市高島地区の秋漁(11月 右)